

はじめに

まず、この本を手にとつてくださって、ありがとうございます。

なぜこの本を手にとつてくださったのかは、人それぞれかと思いますが、私の半生を振り返るには十分すぎるほどのエピソードの数々が、この本には詰まっています。

そして、その中に、読者のみなさんがご自身と重ねるような経験や、感情を感じたりすることがあるかもしれません。

本当は、何かお伝えしたいことがあつて書くのが本なのかもしれませんが、私がみなさんにお伝えすることができるのは、何かの技術やノウハウ、〇〇するにはこうしたほうがいい、などといった、巷に溢れた知識ではないのです。

もちろん人生を生きるうえで、知識は大切です。

知識があれば守れる命がありますし、知識は自分や誰かを助けしてくれるものでもあります。

しかし、知識さえあればいい、頭で考えたことが絶対で、どうしたらうまく生きられるか、という考え方は、時に人間であることの喜びを忘れさせてしまうものでもあります。

人間であることの喜び、とは一体、何でしょうか。

私たちは、この体に備わった豊かな感覚や、一人ひとりの感性を、歳を重ねることによって忘れてしまつてはいないでしょうか？

心で感じる「何か」を、置き去りにしてしまつてはいないでしょうか？

子どものときには感じていた、嬉しい、楽しい、面白い、大好き……。

その純粹な想いは、いつの間にか、懐かしい過去のものとなつてしまい、もう戻れないと思ひ込んでいませんか？

実は、私自身がそうだったからです。

私が育った山の上の環境は、両親が与えてくれた、私へのギフトでした。

しかし、小さいころはあまりにも身近すぎて、自分の体の一部であるような「自然」が、私に与えてくれていたものに気づきませんでした。

そして、人生のあらゆる経験によって、自ら孤独であることを選ぶ、その苦しみと長年闘ってきました。

そして時には、人間的な欲求に溺れることも、現実世界で生きるための術を追い求め、頭でうまく生きる方法ばかり考えていたこともありました。

しかし、そんな人生はどこか虚しく、いつも何か足りないと私の「心」は訴えていました。

なぜ、私の人生は虚しいのか？

いつも寂しいのか？

何か満たされない気持ちがあるのか？

私は、いつも「何か」を探していました。

この本は、いつも何かを追い求め、足りないものを必死に埋めようとし、心で感じる喜びを忘れてしまった、私という一人の人生の物語です。

そして、もしかすると、これはあなたの物語でもあるかもしれません。私の中に、あなたという人を見いだすかもしれません。

それは、本当のあなたを、思い出すきっかけになるかもしれません。

本当の私とは？

本当のあなたとは？

さあ私と一緒に、「何か」を思い出す旅に出かけましょう。

この本を読んでくださったあなたが、心で自由に感じる気持ちや、大切な「何か」を思い出すことを祈って。